

随想

無休連休

明石 巖

十一年ぶりとかの連休だということであるが、私達零細医院にとっては、余り関係ない。

第一に従業員を休ませなければならぬ。その代り家族労力を総動員しての大奮斗であるから、家内や娘達にも気の毒である。

こんな具合で何時まで続くことかと、家族の健康まで心配しなければならぬ。

そもそも接客業というものは、人の休んでいる時に働くことになっていて、特に病気は不測不定の不幸であるから、その仕事にも色々な問題が出て来る。

医学部がゲバ棒発生源になるのも、こうしたことからである。
若い従業員が人並みに休めることを希望するのは当然だし、家内労働で、それに代える小企業の状態は、結局連休どころか無休になる。
私の住んでいる船場はいわゆる「古町

」であって、大きな卸問屋は唐人町筋にあり、この付近は小さな商店ばかりである。

古きにおいても有名な家もあり、西南戦争当時からといわれるものもある。
風呂、八百屋、魚屋、饅頭屋、文房具から食堂、理髪屋、何でもある。病院は勿論、郵便局、交番まで揃っていて、甚々便利だ。

昔からの洗馬風景が残っているのは、この辺で、洗馬橋から上流はお城の一角が見え、柳の間を透して下は、研屋グリの裏、万歳橋のあたりまでである。ことに今は柳の緑が美しく、川沿の家々の裏側が、素顔を見せてくれるのは、いささかながらでも無休のストレスを解きほぐすすがになる。

この古町の人々だが、実に良く働く。主として主婦が先頭に立ち、朝からエプロンがけ、自転車を買出しにゆく。子供を背中に、店の硝子拭きから品物並べ、一家総出である。

人間は働く姿が一番美しいというが、それは本当だ。閑そうな奴隷見苦しい者はない。だから、路傍で長々と立ち話をしている女など、この付近では全く見られない。

農家の重労働とは、とても比較にならないと思うが、この町の零細企業の人達の働きも、随分激しい。連休どころか休みもない。
メーデーなど、仕事をしながら眺めるだけで、全く別の世界、外国のこのようである。

私はこうした勤勉が好きだ。たとえそれが余りに古町的であり時勢におくれているかも知れないが。

人間は三才までに前頭葉の情緒の中樞が発育してしまおうである。だから、この間の教育、ことに家庭環境が非常に大切なことになる。

家庭教育についてはあまり自信がなく、おぼろしい次第であるが、この町の勤勉さは、子供達に大きな影響を与えてくれたと思う。

勤勉さが、最も美しい人間を作り、一番真実性を持っている。そしてこの原則は社会形態がどんなに変わっても同じだ。新聞は汚職で満載され(そしてその多くはウヤムヤになるのだが)、テレビにはゲバ棒の乱舞で、警官や教授さえ殺されたり、つるし上げられたりする。

その上家庭の食事時の話題さえ、兎角政治不信や攻撃になりやすい。
こんな不平不満の中に育つ子供の精神発育は、不安だと思ふ。

だから、船場の勤勉な庶民の中にこそ、最も良い意味の生活環境があったとも思えるのだ。

ただ、これら町の人々に、十一年に一度でも良い、一般労働者と同じような、休める連休を与えてはくれないものだろうか。
勤勉は美德だが、過労は不幸である。こういう谷間を放置することも、社会不安のひとつの源泉にもなるのではないか。(熊本市・医師)

夏のはじめに

本田 節子

新しい動物園に螢池が出来るといふ。昨日のこと「お母さん、〇〇君は螢を見たことがないってよ」と長男がいった。街育ちの彼であってみればそうかも知れない。

幼い頃私の夏は螢ではじまった。それまで竹箒や草箒で捕っていた私も、螢合戦の日ともなると「今夜は螢合戦よ、早く尾花を摘んでおいで」と母に云われて、裏の川原へ馳けていったものである。茅花のときはちっとも見つけられなかったのに、尾花は土手一面に川風にそよいでいる。折れないようにま上に引き抜くとキューと音がする。それを何百本も抜くのはなかなか大変だった。母がはたきのように竹竿の先にくりつけてくると、もう夕方が待ち遠しい。浴衣を着て、下駄を履く。石を踏むにも、夜露に濡れた草の中を歩くにも、下駄の方が都合がいいのである。大人達は何故螢合戦の日を知っていたのだろうか。私は今でもそれが不思議で仕方がない。

いつもよりはずんだ声で誘いにくる友達と連れだって、竿の長さを競いながら川原へ出る。昼間は夢中で魚を捕った川原なのに、暗い中で聞かせせらぎの音はちよっぴり怖い。

ホラ、いるいる、あちらにも、こちらにも、すういすういと光の線をひきながら、こっけいでもあった。

「子どもの身代わりかも知れない」と出費のことは目をつむって入院させた。十日後、太腿から下を切断して包帯を太く巻きたてて退院してきた。
包帯を食いちぎって、血のじむ皮膚をペロペロとなるクロの姿はひととき怪異であった。
サクラが咲きはじめ春たけなわ、包帯もとれ、三本足で巧みにバランスを取りながら屋根の上にも上がれるようになった。

もう以前のように機敏に行動できなくなりすっかり老け込んだ。
怠惰な日が続いて梅雨になった。或る日ふらりと家を出たまま帰って来なかった。「オスネコはよく家を出して何日もたつてからひよっこり帰ってくる」と聞いたので食器などもそのままに置いていた。

夏休みになった。小学生の次男と裏山にセミを取りに行ったところ草むらに横たわったネコの腐乱死体を見つけた。
引きちぎられた黒い毛が散乱し、三本足であることから確かにクロであった。野犬に襲われたらしい。

鹿兒島を出る時、知人に譲ってくればよかった。なまじ情をかけて連れて来たばかりに―と悔いが残った。
たかがネコ一匹と簡単に考えていたが、一つの生命を死まで見届けることは大へんなことだと気付いた。この事件以後、情のうつるペットはいっさい飼育しないと家族で申合わせた。

(読売新聞熊本支局長)

ら、黒い椀の椀まで飛ぶ螢は、どうしてあんなに高い所まで飛べるのだろうか。たれた葉を流れて播らせている草の中のひかりは、あれは用心しなれば、蛇の目なのかも知れないから。遠くで人の声がする。誰なのかな。
その中に螢は数を増し、川原いっぱい舞うその点滅が、ほとんど同時になってくる。螢合戦の最高潮なのだ。螢が灯をとまずと昭ちゃんの顔もよっちゃんの顔もぼろと見える。次の瞬間その顔は暗く見えぬ。思わず顔をよけたくなる程近くを灯が飛んだ。はっと手を伸ばして捕れそうだが、そうはいかない。ゆっくり飛んでいるようでもすいと逃げられる。それを追って尾花の竹竿を近づけると、高く高く飛んでしまふか、或は流れの上へ逃げる。追った勢いで流れの中まで走りこむと、ひよっと水が冷たい。とうとう下駄の鼻緒も濡れてしまった。歩く度に鼻緒が足に刺さる。
「せっちゃん、こっちこっち」と呼ばれて追いかけると、綿菓子のような尾花の中に螢が捕れる。そっと掌の中に包むともぞもぞと動いてくすぐったい。のぞいて見ると大きな源氏螢は、青白い光で息をする。小さな白い花をつけた螢草にたっぷり水を含ませて籠に入れ、その中に螢を入れる。さつき数えればかりなのにまた数えてみる。ともしたり消えたりするので、なかなか数えられない。二十何匹だろう。思わず遠くまで来てしまった。螢もだんだん少なくなってきたしもう帰ろう。螢のいない川原は淋しい。螢はどこへ帰るのだろうか。とうとう宿題

もやっっていない。明日は先生に叱られるだろうなあ。
空に星が流れた。螢が歩いた掌がいっまでも匂う遠い昔のことである。
今でも麦秋の季がくると、私の中の螢は灯をとまず、そして私の夏がはじまる。今の子供達は何で夏がはじまるのだろうか。(熊本市・主婦)

薩摩の黒ネコ

川野 順二

前任地の鹿兒島で、ネズミがやたらとあはれるので近くのラーメン屋から生まれて間もないオスの黒ネコをもらいクロと呼んだ。

「悪魔の使いだ、縁起でもない」と飼育に反対する友人もいたが、地方によってはありがたがって大切にするところもあるからと気にしないことにした。
半歳ほど過ぎたころ、高い熱を出して声も出ないほど衰弱した。酔狂など思っていたが、犬猫病院に連れて行ったらビールス性の伝染病でノドから腸に潰瘍ができていたらしい。

獣医さんの説明によるとこの病気が猫族になかったらネコがふえて困る。いわば自然淘汰である。

クロマイをやれば助かるというので人間並みに四時間ごとに飲ませたら一週間ほどして元気になった。

死線を越えた小さい生命をみてみると以前よりいっそうかわいくなつた。
転動荷物のトラック運転手に頼んで運搬台にミカン箱を乗せてもらい熊本まで連れてきた。隣近所は軒なみにネコを飼っている。それぞれ細張りがあるらしく移ってきたその夜から新入りへのいやがらせと挑発が始まった。
入れ替わり立ち替わり呼び出しにきて大乱闘である。鋭いツメを打ち込まれて片目はずぶれた。足もからだも血まみれであった。「肥後と薩摩は昔から仲が悪いと聞いているが薩摩のネコと知っているのかな」などと冗談がでるほどずいけんかの連続である。
傷だらけの戦いが一カ月ほど続いたろうか、やっと家周辺の縄張りを承認してくれたらしい。全身真っ黒の毛並みはますます光沢を増して「ネコ盛り」になったようだ。
一昨年の年の瀬、寒い朝だった。ニヤーンと消え入るような声で廊下にくすぐまっていた。ネコつまみにしてぶら下げたみて驚いた。
右の後ろ足の膝から下が一枚の皮だけぶらさがり白い骨が露出している。
裏山で小鳥の巣でもあさってワナにかかったのだろうか。手に負えない重傷である。
また犬猫病院に電話して、こんどは往診である。「これは交通事故です。内臓に内出血もあります十日ほど入院すれば助かるでしょう。」との診断。
―ネコの交通事故―あわれであった